

PYはやる気を伸ばし、更に積極的になった。セッション1～5は国境を越えた教育での異なった要素をPYに気付かせるために丁寧に準備した。そこでは花びらフレームワークを使い、図表のプレゼンテーションで彼らの互いの、そして個々の関係性を統合された。それぞれのセッションでは少なくとも2つの交流型、協力型の活動が提供され、PYはタスクとスキルを通じて概念を学んだ。セッションは徐々に基礎からもっとも複雑なことへ移り、PYは批判的に考え、想像力を豊かに行動することが要求された。セッション1では、国境を越えた教育、グローバル市民と全員がリーダーという考えが、学校教育における人材育成の主要なこととして紹介された。セッション2～5では、以下のとおり、異なった要素の適応している事例と人材育成に影響している状況と学校教育の紹介をした。自己（セッション2、包括教育）、学校（セッション3、適応可能な革新）、地域（セッション4、目的をもったコミュニケーション）、努力の結果と言葉（セッション5、変革を起こす協力）。

何度も繰り返し練習した2つの活動（カップソングと手話）はPYに自分たちがグローバル市民、そして全員リーダーになれることを繰り返し観察する機会となった。

船内のディスカッションはDG7のPYが自身の事後活動を準備する際に、振り返りを忘れず、そして戦略的に計画するよう、言うまでもないチャレンジを与え、励ましを与えた。プロジェクトマネジメント準備ワー

クショップでは自分たちのプロジェクト提案をデザイン、催行そして高めるための貴重なアドバイスが与えられた。あるPYは、個人的な又は職業として、成果発表会での共有を通じて将来の相互協力の機会に気が付いていた。興味深いことに、DG7のあるPYは船内での自主活動として日本・ASEAN教育関連展覧会と「We are Unity」手話付き動画を、ほかの人の協力プロジェクトとして行うなど、自発的に活動した。船内ディスカッション活動の順調な運営はDG7を担当した管理部員のおかげである。

振り返ると、本当に、私の「東南アジア青年の船」事業の道りは素晴らしい学びの経験への大きな感謝と共に思い出されるだろう。中村かおり管理官、吉田哲也副管理官、春名知佳主任、事業中のサポートはもとより、私たちの手話ビデオへの多大な協力にも感謝している。同じく、全ての管理部員の皆様、特に白鳥正信さん、岳中美江さんには個人的にも仕事の面でも大変お世話になったことに感謝を申し上げる。彼らの温かい笑顔と対人スキルの素晴らしさから私はいつも自分が言うこと、やること、全てにより良くなるための刺激を受けていた。ファシリテーター仲間の皆さん、につぼん丸キャプテンと乗組員の皆さん、NL、そしてPYの皆さん、特にDG7のPYには、全ての思い出に残る経験を創り、共有してくれたことに最後の感謝を述べたい。本当に皆さんは私の今までの、そしてこれからの人生の中でもそうであると思うが、とても力強い感動を与えてくれた。



(8) 情報とメディア

ファシリテーター: Ms. Devianti Febriani Faridz

PY: 43名

A. 焦点、目的、ゴール

焦点

現代の情報とメディアの社会的影響力を認識し、人々が情報を発信するためにいかにメディアを主体的、かつ効果的に活用できるか、また、メディアからの情報の取捨選択ができるかについて議論し、その上で実行可能な活動案を発表する。

目的

- PYは今日のメディアにおける大きな変化と、それが社会にどう影響するかについて知識を深める。
- PYは社会問題に対する実行可能で効果的なメディア・キャンペーンを設計するノウハウを得る。

ゴール

- 地元の人気メディアの魅力は何かを分析し、日本及びASEAN各国における情報格差の相違点と類似点について認識を深める。
- メディア・バイアスやメディア・スピンを識別できるよう、メディア・リテラシーを理解し、批判的に考える力を育成する。
- 政府、メディア、公共による情報発信のメディア・ツールを識別する。
- 様々な国における社会意識向上のためのメディア利用方法を比較する。
- 日本及びASEAN各国の政府によるASEAN経済共同体の世間一般に対する宣伝手法を認識する。
- 効果的なメディア・キャンペーンを活用した事後活動の基盤を構築する。

B. 事前課題

個人課題1

興味深く、効果的であろうと感じた印刷上やネット上の、もしくはラジオやテレビの広告例の一つを選び、画像、色、様式、タイポグラフィなどの広告要素を考察し、その広告に込められたメッセージの意図を分析すること。印刷物や切り抜き、広告のサンプルなど、メディアの様式の一つのみ選択すること。

個人課題2

多くの視聴者や高い視聴率を獲得し、又は流行を生み出した、人気のある自国のテレビもしくはラジオ番組を選び、その魅力の理由を分析すること。メディアの様式（テレビ又はラジオ番組のどちらか）の一つのみ選択すること。

個人課題3

ネットでのやらせ、ネット上でのいじめ、検閲など、自国のメディア悪用例の一つを選び、それが自分の住む社会に与える影響について分析すること。

個人課題4

ディスカッション活動に向け、以下の項目について各自調査すること。

- 自国におけるメディアの発達
- ICT（情報通信技術）の浸透
- 政府、非政府組織、地域社会がICTの浸透を促進する方法
- 地元で作成されたバイラル動画の社会への影響
- 政府、メディア、公共・民間セクターが、様々なメディア形態を情報発信にどう利用しているのか分析する
- メディアに関する政府の規制

国別課題1

自国において社会意識向上や社会運動促進のために、地元の人物、著名人、組織がソーシャルメディアをどう利用したかについて5分間のプレゼンテーションを作成すること。

国別課題2

ASEAN経済共同体の社会における認知度、それに対する自国政府の反応、ASEAN経済共同体を宣伝し周知させるために自国の駐ASEAN代表者によって講じられている手段につき、5分間のプレゼンテーションを作成すること。

この5分間のプレゼンテーションには、ASEAN経済共同体の一般的な認知度、自国政府のASEAN経済共同体に対する反応、また自国の駐ASEAN代表事務所もしくは日本アセアンセンターによるASEAN経済共同体を世間一般に宣伝する手法について含めること。

C. 活動内容

日本での課題別視察

施設： NHKスタジオパーク

活動

PYは、日本放送協会（NHK）に属する体験型の観光施設であるNHKスタジオパークを訪問した。ここは、NHKのあらゆることについて、シミュレーション、展示、そして最先端技術を使い紹介している。

視察から学んだこと

PYはニューススタジオの実物大模型に赴き、放送施設内でシミュレーションのニュースレポートを行いながら写真を撮ることができ、大いに楽しんだ。

PYはまた、緑の背景が天気予報でどう使用されるかについても見学した。

スタジオパークは体験型の施設で、PYが彩色したキャラクターたちをアニメーションで動かすなどの技術は特に目を見張るものがあった。

ほかにも、動物のドキュメンタリーを制作する技術について見る事ができた。PYは同時に、NHKの番組のこれまでの発展についても学ぶことができた。

施設： Yahoo! Japan及びYouthCreate

活動

特定非営利活動法人YouthCreate原田謙介代表及びヤフー株式会社前田明彦氏による講義

視察から学んだこと

双方からの代表者にお越しいただいたことはPYにとって幸運だった。

Yahoo! Japanは、日本において人気のインターネット検索を中心としたサービスである。「課題解決エンジンであり続ける」という企業理念に基づき、Yahoo! Japanは日本の若者の特に政治問題への参加を増やすべく青年参加の分野でYouthCreateと提携した。

PYは、長時間の質疑応答によって参加国の実情、中でも特に政治とメディアについての方針に関して知ることができ、喜んだ。

講義では、オンライン上で若者と政治家をつなげるなど、地方政治に若者の関心を向ける経験について共有いただいた。

PYがさらに気付いたものとして、Yahoo! Japan が自らのメッセージを若者に届けるにあたり、巨大なソーシャルメディアであるFacebookに頼ることない「課題解決エンジン」としての自信も挙げられた。

グループ・ディスカッションI**ねらい**

- ディスカッション活動のゴールを明確にする。
- 人気メディアが社会に与える影響を理解する。
- 情報格差について学ぶ。

活動

- PYは列を作り、与えられた文章を記憶し同じ情報を同列の者に口頭で伝えていく、伝言ゲームを行った。
- PYは、ラジオやテレビ又は印刷物の効果的な広告について分析する個別課題1を発表した。
- PYは、多くの視聴者や高い視聴率を獲得し、又は流行を生み出した人気のある自国のテレビもしくはラ

ジオ番組を選び、その魅力の理由を分析する個別課題2を発表した。

- PYは5人ごとのグループに分かれて、最も魅力的かつ革新的と思えたラジオもしくはテレビ番組の一つの国から選び、順番に全体へ発表していった。
- PYは各国のメディアの発達について、また世界的なICTの浸透についての共有を行った。
- PYは政府、非政府組織、地域社会がICTの浸透を促進する方法について共有を行った。
- PYは一般の人々に対するネット上のバイラル動画の影響について共有を行った。

成果

- 伝言ゲームにおいて、PYは口頭により広まるメッセージがいかに簡単に歪められるかを学んだ。各列最後の者が書き出した文章のほとんどは不正確なだけでなく、原文とは随分異なっていた。ここでは情報の一部が逸失すると口頭のメッセージは簡単に誤解されてしまいやすいということが分かった。
- 個人課題1では、PYはASEAN地域と日本から集まった、ラジオ及びテレビ番組上もしくは印刷上の人気広告を沢山視聴した。最後に、日本PYにより共有されたテレビ広告が最も効果的であるもの選ばれた。この広告は、人生とは競争ではなく、すべての者は互いに競い合いどちらが優れているか比べ合うのではなく自らの価値観で自らの人生を楽しむべきだというメッセージを伝えるものであった。この活動からPYは、どのような要素が効果的な広告を生み出すかについて学んだ。成功する広告は、簡潔で明瞭なメッセージを持ち、コンセプトや撮影法もしくは印刷レイアウトが独特である。多くのPYは、人気のテレビ広告がほとんどの場合、心温まる誰にとっても身近な内容のものであると結論付けた。PYは、広告の中で異なる言語が使われているが、その物語は愛や郷愁といった普遍的なテーマを孕んでいることに気が付いた。PYは、広告の世界において、成功する広告とは記憶に残りやすいものだけではなく、商品の売上向上や特定の物事に対する社会意識の向上といった広告の目的に資するものであると理解した。
- 個人課題2では、PYは多くの視聴者を獲得したラジオやテレビ番組について議論した。PYは自国で成功しているテレビ番組について共有を行った。PYは互いに、テレビ番組の成功は一般大衆に受けが良く創造的なコンセプトを適用できる人気者や有名人の起用が一因になると思われることで合意した。
- PYはまた、社会における情報格差を縮めるための政府や民間によるICTの発達についても議論した。す

すべてのPYは、各国政府が皆にとって容易にインターネット上の情報に接続できるよう、様々なプロジェクトや事業によって情報格差を縮める具体的な方策を打っていることに同意した。しかしながら、インターネット接続は社会基盤の有無に左右される。そしてこれは国の経済成長に大いに依存するものである。

- e. 結論として、情報を適切に対象者まで届けるには、対象者が日常的に用いる新旧のメディアを使用することが肝要である。対象者を惹きつけるには、簡潔なメッセージと新鮮な手法が最善である。都市部だけでなく郊外においてもインターネットがより簡単より高速に接続できるよう官民で取組が行われている。

グループ・ディスカッションII

ねらい

- a. メディア・リテラシーの概念を理解する。
- b. 受信者として情報を選択する方法を識別する。
- c. 情報発信の倫理的な方法を概説する。

活動

- a. メディア・リテラシー及びネット上でのいじめによる悪影響に関するビデオを鑑賞した。
- b. メディア・バイアスを学ぶためニュース記事を分析した。
- c. 批判的に評価し、信頼できる情報を取得する方法を共有した。また、メディア・バイアス、メディア・スピン、アジェンダ設定について認識した。
- d. メディア利用とメディアの倫理的利用に関して、プラス面とマイナス面を共有した。
- e. PYは個人課題3の、自国におけるメディア悪用例に関するニュース記事について発表及び議論を行った。(例：ネット上でのやらせ、ネット上でのいじめ、検閲など。)

成果

- a. PYは自国における新旧メディアを通じた広告や番組の内容に触れる際のメディア・リテラシーの重要性について学んだ。

プライミングやフレーミング、アジェンダの設定や構築に関するビデオ教材を通じて、PYはメディアが一般大衆の認識に影響を及ぼす際に使用する様々な技術について学んだ。メディアにおけるバイアスを見破る方法を学んだだけでなく、ソーシャルメディアのプラットフォームを通じた情報伝達においてバイアスを回避する重要性についても理解を深めた。

ディスカッションを通じて、PYは各国のアジェンダ設定と、地元メディアがどのようにニュースと現実世界への見方を提供しているかについて共有した。一方的なニュース報道が一般大衆の考えにいか

に影響を及ぼしたか、またそれゆえ情報伝達において客観性が必要であるという事例を数多く目にした。

- b. ネット上のいじめに関するビデオでは、事実に対して性犯罪者と非難された男性が描かれていた。彼に対する誤情報及び悪意あるメッセージがソーシャルメディア上に拡散し、ネット上でのいじめを扇動することになった。証拠がないにもかかわらず、否定的な報道によって彼の家族は恥を感じ、彼と絶縁し、彼を絶望の淵に陥れることとなった。これはソーシャルメディアが人々の精神的安定に持つ強い影響力を示す事例であった。
- c. PYはインドネシアの英字新聞によるIS（イスラミック・ステート）についての記事を渡され、その記事の中に反映されているメディア・バイアスを見破り分析するグループ・ワークを行った。情報の抜けや情報元の選択、メディア・スピンやメディア・ラベリングからなるバイアスが記事中では明らかに見られた。

PYはまた、メディアの倫理的な使用についても議論した。偏った意図のもと、ある視点からの報道をさせるような当局による内的圧力についてメディアの職業人としてどのように対応するかに関した質問が投げかけられた。個人的な利益やより多くの政治的影響力を得るためにメディアを悪用する複数の団体が存在する事例が各国に見られると全員が同意した。

ASEAN加盟国や日本のいくつかの事例においては、メディア悪用の典型例は検閲である。メディアは、世間一般に真実を共有するための土台であるべきで、検閲がなされるのは必要性がある時のみであり、その際ですら世間一般に対して説明がなされるべきなのである。

最後まで、このDGは依然倫理的ジャーナリズムの理想を希求し、また、人々が社会問題に対して知識を深め、それが既存のバイアスや社会的圧力の存在に左右されない意思決定に有用となるような、バランスがとれた記事を世間一般に提供することに忠実であり続ける立場をとった。

グループ・ディスカッションIII

ねらい

- a. 社会において異なる集団のメディア利用方法に、いかに相違があるかを比較する。
- b. 市民ジャーナリズムに基づく短編ビデオを制作する。

活動

- a. PYは、安全意識向上キャンペーンに関するビデオを鑑賞した。
- b. PYは、政府、メディア、民間及び公共が様々な形態のメディアを情報発信にどう利用しているかを分析

- した。また、政府による既存の規制があるかについても議論した。
- c. PYsは、人々がメッセージを伝達するためにいかに積極的かつ効果的にメディアを利用すべきかを話し合った。
- d. PYは、市民ジャーナリズム及びニュース発表や記者招待の必要性についても学んだ。
- e. PYは、船内の社会問題について描く市民ジャーナリズム的な2分間のビデオを共作するため、4から5人のグループに分けられた。

成果

- a. PYは、公共事業の広告としては世界で三番目に成功した、オーストラリアの鉄道会社による「Dumb Ways to Die (愚かに死ぬ方法)」を視聴し、線路付近での安全意識向上に関するこのよく練られたキャンペーンが、線路関連事故を21%も減らしたことを学んだ。
- b. 次に、PYは4人ごとのグループに分けられ、自国におけるメディア規制につき議論した。PYは、いかに検閲が単に社会認識だけでなく人々の行動にまで影響するかについても、数多くの事例を用いて議論した。この議論こそ、報道機関の責任について適切に理解する必要性を、PYが活動を通じて強調した理由である。
- c. PYは、政府、民間企業や公共といった異なるセクターによるソーシャルメディアの利用方法がいかに異なるかを学んだ。また、メッセージを伝達するにあたり効果的であるためには、メディアの種類を対象者の生活様式、所在地や信条に合わせる必要があるとの認識を深めた。
- d. PYは、地場の組織が種々の意見擁護を促す際に使用する、メッセージを伝達したり態度を変えたりするための、メディアが有する力を理解した。
- 懸念される社会問題を浮かび上がらせ、目撃した事故を報告するため、世間一般もニュース報道ができるということを理解するために市民ジャーナリズムに関するビデオを視聴した。船内の社会問題に関する2分間のニュース・レポートを制作することが初めての船内グループ・プロジェクトとなった。社会問題としては、食べ残し、モーニング・エクササイズ、飲酒問題、食べ物の持ち出し、船内恋愛、国別伝言板の悪用、健康問題、船室での生活、電気使用の問題、洗濯室での問題などが選ばれた。映像制作やメディアの経験があるPYにとっては、自らのノウハウやコンテ・原稿作りの秘訣を共有する機会となった。小グループによるディスカッションでは、話の切り口を決めたり、レポートを視聴者にとって信頼でき興味深いものにししたりする方策を話し合うのに終始した。

- e. 船内グループ・プロジェクトによってPYは、報道計画の策定、ニュース原稿の執筆、レポートの録画や専用ソフトウェアを使用した編集を要求される手間のかかるプロジェクトを遂行するためのチームワークを鍛えることができた。

ベトナムでの課題別視察

施設： トウイチェー新聞

活動

まず、すべてのPYはいくつかのグループに分けられ、それぞれには最低一人の職員が配属された。職員のほとんどはレポーターや記者であった。最初の活動は、日本及びASEAN加盟国における異文化交流促進についてメディアをいかに利用できるかについてのPYと記者間でのディスカッション・セッションであった。

各PYは数多くの素晴らしいアイデアを共有した。たとえば、マレーシアPYは、自国でのメディア組織がこの目的のために政府とどのように協力しているかについて話した。政府は主に、促進施策に対する資金提供を行い、他のASEAN加盟国や日本の文化関連組織とつながることを手助けた。

他にも、カンボジアとミャンマーでは、人口の多くが依然農村部に住み、インターネットへの接続を持たないため、ほとんどの人が新聞やラジオなどの伝統的なメディアを今日でも使用している。

一方、シンガポールでは、ほとんどの場所でインターネットの接続が可能のため、FacebookやTwitter、Instagramといったソーシャルネットワークが大いに使用されている。

視察から学んだこと

議論された問題の一つが、新聞など活字メディアの凋落である。今日、スマートフォンを通じてインターネットに接続できる人口が急増していることによって、新聞購読者数が徐々に減少している。この問題に対し、手段がいくつか講じられた。活字メディアは魅力を増すために、興味深い見出しや画像を使用するだけでなく、図やレイアウトのデザインについても改善を施した。

人気を博しつつある他の要素としては、双方向性が挙げられる。多くの活字メディアでは、購読者数増加のためにいくつかのゲームを紙上に収め、その勝者に景品を贈呈している。

また、紙面の一部分を特定の問題や性別・年齢層のために割り当てることで、読者に自分が受け入れられているようにも感じさせる。ベトナムでは、オンライン・メディアの発展と接続のしやすさをよそに、活字メディアは影響力あるメディアの地位を維持している。

ディスカッション・セッションに続いて、PYは編集ブースにて映像や音響をいかに記者たちが編集するかを直接目にするためにテレビのニュースルームへと通さ

れ、ニュース素材収集後のテレビ番組制作の舞台裏をのぞき見することを楽しんだ。

グループ・ディスカッションIV

ねらい

- メディアの発達がどのように人々の情報作成、発信、受信方法に影響するか認識する。
- ソーシャルメディアを利用して社会運動を促進する方法について比較する。

活動

- PYは国別課題1の発表を行った。社会意識向上や社会運動促進のため、地元の人物、著名人、組織がソーシャルメディアをどう利用したか事例を発表した。
- PYは、発表された様々な国におけるソーシャルメディアを利用した社会意識向上の手法の中で、何が効果的であったかを議論した。各小グループから一人ずつ、最も革新的で魅力的な事例を全体に共有した。

成果

- PYは、ソーシャルメディアの持つ力に関するビデオ教材を視聴して、社会意識向上や、社会運動を作り上げる上でソーシャルメディアの有する力に気付くことができた。

次にPYは国別のグループに分かれ、自国において社会意識向上や社会運動促進のため、地元の人物、著名人、組織がソーシャルメディアをどう利用したかについて発表した。

PYは非常に多くの、ソーシャルメディアを使用した運動の成功例を比較し、ソーシャルメディア戦略の影響力と有効性を理解することができた。質疑応答では、どのように組織が運動やプロジェクトを持続させ、社会にどのような影響をもたらすことができたのかにつき質問がなされた。

- そしてPYは4人ごとのグループに分けられ、自国においてソーシャルメディア上で社会問題につき啓蒙した成功事例について議論した。ソーシャルメディアは適切に使用されれば、社会変革の道具となり得るのである。

PYは選定した自国の事例における強み、弱み、機会、脅威を割り出した。この活動は、効果的かつ経費のかからないオンライン上の運動をいかに始めるか理解する一助となった。結果として、PYは事後活動を展開する上で使用できる手法を見出すことができた。

グループ・ディスカッションV

ねらい

- 各国政府がASEAN経済共同体を世間一般に宣伝する手法について理解する。
- ポスター・デザインを主としたASEAN経済共同体の

宣伝キャンペーンを起こす。

活動

- PYは国別課題2を発表した。PYはASEAN経済共同体の一般的な認知度と自国がどのようにASEAN経済共同体を宣伝し、社会に周知させているかについての事例研究や具体例を発表した。
- PYは、様々な国におけるASEAN経済共同体の社会的認知度を高めるために講じられた手法として何が効果的だったかを議論した。
- PYは、ASEAN経済共同体とその利益について宣伝するためのポスターを制作する準備で協力した。

成果

- PYは国別課題2を通じて、自国政府がASEAN経済共同体の宣伝をどう行っているか見出すことができた。
- PYは自国においてASEAN経済共同体がどのように機能しているかについて、非常に多くの情報を集めることができた。発表を通じて、PYはASEAN経済共同体が青年の間ではあまり知られていないことに気が付いた。他の見方としては、ASEAN経済共同体は人々に対して十分開かれておらず、徐々にビジネスや民間セクターに対して利するようになっていくといった見方もあった。青年間での認識欠如は、統合的な地域経済に恩恵を得ることから青年を遠ざけてしまいかねない。
- PYによる第二の船内グループ・プロジェクトとして、大学生向けにASEAN経済共同体を宣伝する目的のポスターを制作することが示された。学生にとってポスターを興味深いものにし、かつASEAN経済共同体について知識を与えられるものにするためにはどうすればいいかについて、PYから質問が投げかけられた。PYは、印刷広告の基本的なレイアウトについてのコツや、魅力的で効果的なポスターに必要な要素を伝授された。

D. 決意・期待される今後の活動

PYは議論を通じて、メディアに精通することの大切さを認識し、情報やニュースなど一つの情報源だけを信頼しないことの重要性を理解した。

また、メディア・バイアス、メディア・スピン、アジェンダ設定についての認識を深めた。PYは情報を受信する際にはより批判的になり、また、発信する際には慎重になるべきだと理解した。

PYは社会におけるメディア・リテラシーの促進運動や活動に、より協力的になるであろう。

E. 評価・反省（自己評価セッション）

概して、ほとんどのPYがディスカッション活動について満足し、何人かは期待以上のものだと述べた。

多くの者が、メディア産業の仕組み、英語による発言

や聞き取りの訓練、プレゼンテーション力の向上といった当初各自で設定した目標をディスカッション活動で満たすことができた」と述べた。

前述の目標に加え、ポスター・デザインやニュース・レポートの制作といった新しく獲得したスキルを使用して、国別事後活動を含め自国において社会的な大義をより広めるようソーシャルメディアを活用すると述べた。

PYはメディア・リテラシー、メディア・バイアスやメディア・スピンへの理解を深めることができ、これによってニュースや情報の入手先に対しより批判的に臨むと述べた。

船内グループ・プロジェクトでは、PYは異なる国からなる参加者同士のチームワークを得ることができ、また、映像の撮影や編集、原稿作成やプレゼンテーションに関する技能を学んだ。

グループ・プロジェクトによって自らの殻を破ることができ、自信をつけることができた」と述べる者までいた。

F. ファシリテーター所感

第43回「東南アジア青年の船」事業のファシリテーターを務めたことは、誠に光栄で精神的に実りある経験であった。2000年にPYとしてディスカッション活動小委員会議長を務め、私はディスカッション活動のファシリテーション経験を得た。

しかしながら、ファシリテーターを務めるということは、議論をファシリテーションするだけでなく、テレビ・プロデューサーやリポーターとしての私の仕事の経験に基づいた知識を伝授するということも求められた。情報とメディアについての私の知識を共有できることは刺激的であった。

間接的に、東南アジアの多くの国々における未来の指導者たちが有する物事の見方や考え方を育み、変化を加えることを、本事業は私に許してくれた。

私をこのような役目に任じていただいた日本政府内閣府及び（一財）青少年国際交流推進センターに対し、心からの感謝の意を表したい。

NHKスタジオパークへの課題別視察は、PYが体験型のゲームを楽しむことができ、愉快なものだった。一方、Yahoo! Japan及びYouthCreateによる講義は、日本の若者の政治離れに関する現実の問題点や若者に対し政治参加を呼び掛けるための方策を紹介することで、真にPYの知的好奇心をそそった。

トゥイチャー新聞も、PYが本物のニュースルームをつぶさに目にすることができ、メディアを通じた異文化理解の促進をどう行うかにつき記者と交流することができて、同じく良い訪問先となった。

特に小グループでの議論においてメディアの発達、検閲、メディア・バイアス、メディア分析や広告技術といった関連的な主題についてもPYが語り合うことができる姿を見られたのは、達成感の湧く出来事であった。

DG8の主たる船内グループ・プロジェクトであったニュース・レポート、ポスター・デザイン、そして成果発表会におけるプレゼンテーションに取り組む際、PYは情熱的であり創造的であった。

船内グループ・プロジェクトによってPYは各種技能を得ただけでなく、チームワーク、創造力、譲歩、リーダーシップ、厳しい納期のもと行動することを学べた。

ディスカッション・セッションがすべて終了した際には、複数のPYが、情報とメディアにつき知識を得ただけではなく、自信をつけ、英語で自身のことをさらに表現することができるようになったと語った。

我々がPYの知的かつ情動的な進歩のきっかけとなったと知れたのは、心温まるものであった。

ディスカッション活動運営委員会もまた、今年度のDG活動の総まとめとして実施された成果発表会を成功に導くため重要な役割を果たしてくれた。

私はナショナル・リーダー、管理官、管理部員の各位に対し、第43回「東南アジア青年の船」事業の航海を通じた支援を感謝申し上げたい。各DGのPYの知識を発展させることに休みなく取り組んだ熱心なファシリテーターたちと一緒に仕事できたことも素敵な経験となった。

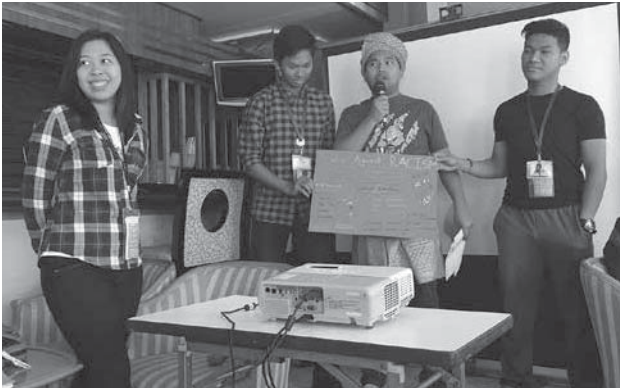
最後に、セッション中の議論や成果発表会を比類なき極めて優れたものにすべく素晴らしい協力をしたDG8のPYの貢献に対し、感謝の意を表したい。

舞台上でのインタビュー、写真によるスライドショー、船内の4つの異なる地点からの模擬中継レポートを含む成果発表会での15分間のプレゼンテーションの準備におけるDG8のPYの能力には感心させられた。

模擬中継レポートをうまく行うのは実に困難なものであった。本物のニュースルームの制作チームのように、PYは協働していた。

エグゼクティブプロデューサー、アシスタントプロデューサー、ライター、プレゼンター、リポーター、写真及び記録係、カメラマン、編集者がいた。模擬中継レポート制作の経験によって、PYはテレビニュースの世界で働くとはどういうことかを感じ取ることができた。

その結果、自己評価セッションにおいて、43名の内14名のPYが、リポーターやプロデューサー、フォト・ジャーナリストといったジャーナリズムの進路を検討すると述べるに至った。私は、このディスカッション・セッション中に獲得された教えやスキルが、PYの職業的スキルを高め、メディア・リテラシーの重要性を世間に啓蒙することを促すと心から祈念している。



3 帰国報告会（各国事後活動提案）

(1) 概要

12月14日、船内ドルフィンホールにて帰国報告会を行った。PYは国ごとに、事後活動のアクションプランを発表し共有した。これらのアクションプランは、PYが、第43回「東南アジア青年の船」事業で学んだことを最大限に生かし、社会に対してできることの第一歩として作成した。

- 16:00-17:10 国ごとの発表
- 17:10-17:25 中村かおり管理官からの報告
- 17:25-17:30 PY代表Ms. Suci Utami Armand（インドネシアYL）挨拶

(2) 報告内容

A. 日本

「SHARE-UP（シェア・アップ）」は、日本PYが自らの経験を共有することにより、高校生が視野を広げられる機会を設ける。日本PYは、次世代を啓発、力づけ、勇気づけるために、高校生と対話する。2017年4月から1年を通して、各自の卒業校にて活動する。

プロジェクト名：「SHARE-UP（シェア・アップ）」

対象：高校生

背景

- 機会不足
- 動機不足
- 選択肢不足

目的

- 10代青年の視野を広げる

活動内容

- 共有: 体験談／野望／知識
- 体験: ディスカッション／グループワーク
- 振り返り: まとめ／評価

タイムライン

- 2017年1月: リストアップ
- 2017年1月: 提携

- 2017年4月: 高校訪問

期待される効果

- 機会増加
- 動機向上
- 選択肢増加

B. ベトナム

「Dream High（夢を高く）」キャンペーンは異なるトピックに基づき4つの活動をする。1つ目のプロジェクト「Pay It Forward（ペイ・フォワード、恩送り）」は、DG2やDG5に触発されたプロジェクトで、ベトナム国会や多くの青年組織と協働で2016年12月に実施予定。ベトナムPYは、退役軍人と少数民族の人たちのためのプロジェクト資金として2,000米ドル以上を集め、地元青年とともにホアビン省で文化パフォーマンスを行う。

プロジェクト名：「Dream High（夢を高く）」キャンペーン
社会貢献／青年研修／夢の分かち合い

- プログラム1：「Pay it forward（ペイ・フォワード、恩送り）」
2016年12月 ホアビン省への訪問
- プログラム2：「あなたが思うよりも近い」
2017年2月 HIV感染症ビデオシリーズ
- プログラム3：「Pass on the fire（火をつなげる）」
2017年4月 研修ワークショップシリーズ
- プログラム4：「Dream High（夢を高く）」
2017年9-11月 英語教室デザインコンテスト

[プログラム1: Pay it forward（ペイ・フォワード、恩送り）]

背景

- (a) 740万人の退役軍人が支援を必要としている
- (b) ムオン族：豊かな文化を保つが知られていない民族
- (c) 青年の意識が低い

目的

- (a) 医療の提供

- (b) 文化の促進
- (c) 青年の意識向上

対象

- (a) 退役軍人とその家族
- (b) 少数民族
- (c) 青年

実施プラン

- 日時: 2016年12月17~18日
- 実施場所: 貧困地域及びホアビン省のムオン族の多く住む地域
- 内容: (a) 公的医療: 医療サポート、(b) 教育: レクリエーション活動、(c) 文化促進: ホームステイと文化パフォーマンス
- 方法:
 - フェーズ1: プレーンストーミング/地元関係当局へ連絡
 - フェーズ2: 資金調達/ロジスティクス及び準備
 - フェーズ3: 実施/次の活動の準備

期待される効果と評価指標

- 退役軍人の20家族により良い公的医療を提供
- PY、地元の人、ボランティアを含め500名の参加者における異文化理解の促進
- 相互理解の促進と世代間ギャップの軽減
- 「東南アジア青年の船」事業、自治体、青年組織、既参加青年のネットワーク、民間支援者など、社会の様々なステークホルダーとのネットワーク構築

C. タイ

「サイワースィボーティムガン（何も捨てなかったら）」プロジェクトは、子供たちのゴミ捨てに関する意識向上を目的とする。2017年3月にキャンペーン活動、2017年5月に1日イベントを実施予定。「東南アジア青年の船」事業中に海に浮かぶゴミを目の当たりにして触発され考案。

プロジェクト名: 「サイワースィボーティムガン（何も捨てなかったら）」

背景

- 海に多くのゴミが浮かんでいる
- タイでは、ゴミの投棄に関する条例が厳しくない
- 「環境ツーリズム」もしくは「グリーンツーリズム」の出現

目的

- 海へのゴミ捨てに関する一般の意識の向上
- 「環境ツーリズム」の促進
- 環境保護促進について関係組織と連携

対象

- 主な対象: 当該地域の小学4~6年生（約30名）
- 当該地域を訪れるタイ人及び外国人観光者
- 一般人（ソーシャルメディアを通して）

活動内容

- ユースキャンプ（一泊二日）
 - 1日目: アイスブレーキング活動/ビーチ清掃
 - 2日目: 「海に捨てられるごみの影響と対応策」のセッション
- 展示
 - 1日展示会、オンライン展示、ソーシャルメディアやプレス

期待される効果

- 海のゴミの影響やゴミを適切に捨てる方法に関する意識向上
- 「環境ツーリズム」の理解向上
- 「東南アジア青年の船」事業についての理解促進
- 当該地域の動物や植物の保護

タイムライン

- 2017年1月: 地区/現地の決定、ビデオ設置と作業配分
- 2017年2月: 当該地区の調査と準備会
- 2017年3月: ユースキャンプの実施と評価
- 2017年4月: 展示会の準備
- 2017年5月: 展示会及びオンライン展示（プレス）

D. カンボジア

「青年グリーン・キャンプ」は、森林再生とグリーン・ライフスタイルを目的として、青年の参加を促進し、グリーンな暮らしと洪水についての意識向上を図る。2017年の第2四半期に4日間実施する。

プロジェクト名: 「青年グリーン・キャンプ」

背景

- 急速な森林破壊
- 青年参加や防災意識の不足
- 環境に優しくない生活スタイル

目的

- 森林再生とグリーンな生活スタイルの促進
- グリーンな生活スタイルと洪水に関する意識向上
- 積極的な青年参加の促進

対象

- 青年100名（キャンプ）
- 地元青年50名（ワークショップ）
- 一般人
- 小学生100名

活動内容

- グリーン・キャンプ
- 防災ワークショップ（ゲストスピーカー）
- 「東南アジア青年の船」事業を模した活動（SG活動とディスカッション）
- 社会貢献活動

期待される効果

- 熱帯樹木300本の植林

- ・ 防災知識の習得
- ・ 意識とメッセージの拡散
- ・ よりグリーンな生活スタイルの促進
- ・ ネットワークの構築
- ・ 「東南アジア青年の船」事業の周知
- ・ 楽しく新しい体験
- ・ 社会活動への参加
- ・ 小学生100名に学習資料の提供

タイムライン

- ・ 2017年1月： 最終立案、人材確保、スポンサー確保
- ・ 2017年2-4月： メディアキャンペーン、スポンサー援助受取り、ロジスティクス、プロジェクト広報
- ・ 2017年5月： プロジェクト実施

E. シンガポール

「アメージングJ-ASEANレース」は、児童養護施設で生活する子供たちのために2017年2月に開催する。日本とASEAN各国の多様な文化を、言語、伝統的な食べ物、手工芸品等を通して、参加者と共有することを目的とする。当イベントは、若いシンガポール人に他の文化への探求心や興味を生じさせる。

プロジェクト名： 「アメージングJ-ASEANレース」

対象

- ・ 受益者： サンビーム・プレイス（児童養護施設）
- ・ 受益者の種類： 児童養護施設で生活する6～14歳の子供たち30名

背景

- ・ 世界を旅する機会の少なさ
- ・ 他の文化理解の不足
- ・ 動機や長期的目標の欠如

目的

- ・ 日本とASEAN各国の文化紹介
- ・ 他の文化について知ることへの子供たちの動機づけ
- ・ 「東南アジア青年の船」事業に関する理解促進と将来のPY育成

活動内容

- ・ 11のブースにて、手工芸品、食べ物、言語、伝統的ゲームなど紹介
- ・ 「東南アジア青年の船」事業の写真の共有

期待される効果

- ・ 日本とASEAN各国文化の認識と理解促進
- ・ 他の文化への興味向上
- ・ 将来PYになりたいと思う

持続可能性

- ・ ボランティア福祉団体との持続的なパートナーシップ
- ・ プロジェクトの繰り返し

タイムライン

- ・ 2016年12月8日： プロジェクト概念化
- ・ 2016年12月10日～2017年2月10日： 計画と準備

- ・ 2016年12月15日～2017年2月3日： ボランティア募集
- ・ 2017年2月11日： シミュレーションとボランティアへの説明
- ・ 2017年2月18日： プロジェクト実施と自己評価
- ・ 2017年2月25日： 受益者とともにプロジェクトの振り返り

F. インドネシア

「I am Able（私はできる）」の目的の一つは、障害と共に生きる人とのコミュニケーションに手話を使うことの啓発である。プロジェクトは2期に分かれている。短期プロジェクトとして、2016年12月18日にジャカルタで実施する手話キャンペーン、長期プロジェクトとして、手話での交流のためのメディアとして立ち上げるウェブサイトとインドネシア全域の30都市で実施する「One Day With（一日一緒に）」プログラムである（2017年1～11月）。

プロジェクト名： 「I am Able（私はできる）」
#ICanSign, #SignToShine

背景

- ・ 共通言語の一つとしての手話
- ・ 手話を習得に関する社会の興味欠如
- ・ 障害と共に生きる人のコミュニティ間のつながりの薄さとボランティア育成のための資源の不足

目的

- ・ 障害と共に生きる人のコミュニティとコミュニケーションするために手話の使用を促進する
- ・ 社会に手話を紹介する
- ・ 手話の習得への社会の関心を上げる
- ・ 手話習得のためのリソースを学びたい人とつなげる
- ・ コミュニティ間の手話スキルを向上する

[短期プロジェクト]

プロジェクト名： 「I am Able（私はできる）」キャンペーン

場所： カーフリー・デイ（自動車乗り入れ禁止）を実施するエリア（ジャカルタ）

日時： 2016年12月18日6:30～11:00

活動内容

- ・ 手話キャンペーン（交流ゲーム、マネキンチャレンジ）
- ・ 障害と共に生きる人のコミュニティによる手話ワークショップ
- ・ 写真撮影ブース
- ・ 第43回「東南アジア青年の船」事業インドネシアPY、SSEAYP インターナショナル・インドネシア、障害と共に生きる人のコミュニティの協働で、手話による歌のパフォーマンス

対象

障害と共に生きる人（異なる能力を持つ人）のコミュニティ（招待制）、カーフリー・デイ参加者（100名）

[長期プロジェクト 1]

プロジェクト名： ウェブサイト「Sign to Shine（手話で輝く）」

タイムライン： 2017年1月に開始

活動内容

- 手話のビデオ講座（第43回「東南アジア青年の船」事業インドネシアPY 及び障害と共に生きる人コミュニティの貢献）
- 「One Day With（一日一緒に）」プロジェクトの最新情報
- 障害と共に生きる人のコミュニティのデータベース
- 心を刺激するビデオ（障害と共に生きる人のコミュニティによる貢献）
- 障害と共に生きる人のコミュニティ広報の製品
- 専門家による相談

[長期プロジェクト 2]

プロジェクト名： 「One Day With（一日一緒に）」

タイムライン： 2017年1月～11月

場所： インドネシア全域の30都市

活動内容

- 障害と共に生きる人のコミュニティとの1日イベント
- ソーシャルメディア（InstagramやFacebook）とウェブサイトでの共有

期待される効果

- 障害と共に生きる人のコミュニティと社会のギャップ軽減
- ウェブサイト達成： 毎月100名の閲覧

G. ブルネイ

ブルネイにおける健康的な食事と生活スタイルの啓発及び既存のHIV啓発プログラムの拡大に関する包括的検討により、ブルネイPYは「4 Me, You and Our Future（私とあなたと、私たちの未来のために）」と題したプロジェクトを開始する。啓発活動と社会貢献活動を、適切な専門家組織の支援を得て実施する

プロジェクト名： 「4 Me, You and Our Future（私とあなたと、私たちの未来のために）」

背景

- ブルネイでは、肥満や不健康な食事が問題となっている
 - 不健康な食事と生活スタイル
 - 健康的な食事の重要性を強調
- ブルネイでは以下の理由によりHIV感染数が増加傾向にある
 - HIV啓発が不十分
 - より多くの人がHIV検査を受検している

目的

- 健康的な生活スタイルとバランスのとれた食事に関する意識の向上を図る

- より健康になる、食事についてより知る、良い食事をとることを望む人々を力づけする
- 既存のHIV啓発プログラムを拡大する

対象： ブルネイの社会

活動内容

- 1日イベント（場所：ヘルスプロモーションセンター）
- 保健従事者、組織、保健省との連携
- 内容：ポスターやビデオ展示／共有セッション／ズンパ／献血

期待される効果

- ブルネイ社会の積極的参加
- 適切な知識による社会への力づけ

タイムライン

- 2017年1月： 委員会発足（中心人物）、企画、企画書作成と承認
- 2017年2月： 準備、招待と広報
- 2017年3月： 事後活動の実施
- 2017年4月： 振り返りと評価

H. ラオス

教育の重要性を認識したラオスPYは10分間のビデオ製作に取り組むことにした。「I Do Regret…（私は後悔する）」という題が示す通り、ビデオの内容は、子供たちが勉学に励まないとどうなるかについて啓発、また子供に学校に行くよう勧めるための親の認識を変化させるためのものになっている。ビデオは2017年3月に完成する。

プロジェクト名： 「I Do Regret…（私は後悔する）」

背景

- ガイダンスや良い模範になる人の不足
- 刺激の欠如
- 教育の重要性に関する認識の低さ

目的

- 国家社会経済開発計画VIII（2016～2020）への貢献
- 生徒に学ぶことの動機づけ
- 生徒への道筋を提示

対象

- 学校生徒
- 生徒の保護者

内容

- 10分以内
- 事実に基づいた話
- 主な俳優2名
- 教育の重要性についての理解促進

方法

- 3～5か所の学校訪問
- オンラインメディア

タイムライン

- 2017年1月： ストーリー最終決定、場所調査、ラオス青年同盟及び関係する省への企画書提出、企画書承
- 2017年2月： スポンサー確保、俳優決定
- 2017年3月： ビデオ製作、ビデオリリース

期待される効果

- 関係セクターから更に支援を得る
- オンラインメディアを通して10,000の閲覧者を得る
- 5つの学校の生徒の少なくとも60%が刺激を得る
- ビデオの持続可能性

評価方法

- アンケート調査
- インタビュー

I. マレーシア

「Walk for A Brighter Future (明るい未来に向かって歩こう)」は、視覚障害と共に生きる人のケアについての市民の意識向上及びマレーシア視覚障害者センターの施設改善のための資金調達を目的としている。また、事後活動の間、展示ブースを設けて、目の健康の重要性について市民に啓発する。

プロジェクト名： 「Walk for A Brighter Future (明るい未来に向かって歩こう)」

背景

- 市民の理解向上
- リソース改善
- 交流の促進
- 視覚障害と共に生きる人を包摂する社会

目的

- 意識向上
- 施設改善
- 目の健康の促進
- ボランティア活動の促進

対象

- 600~1,000名の参加者：個人／視覚障害と共に生きる人々／ペア／家族

活動内容

- 1日イベント
 - 7:00 ウォーカソン (長距離競歩)
 - 9:00 朝食、展示ブース
 - 10:00 ステージ (トークショー、ズンバダンス、閉会式)

タイムライン

- 2016年12月： 開始と企画
- 2017年1月： スポンサーと実施場所確保
- 2017年2月： 登録受付と広報
- 2017年3月： リハーサルと最終確認
- 2017年4月： 実施
- 2017年5月： 振り返りと将来へ向けての企画

J. ミャンマー

「#CultureFever (文化フィーバー)」プログラムの目的は、ミャンマー文化の理解を促進し、青年に地域の製品をより使うよう伝え、グローバル化をうまく利用することである。1日の文化フェアを開催し、売り上げの70%はヤンゴンの精神病院Ywar Thar Gyiに寄付、30%は今後実施する以下の社会活動の資金とする。動物保護プロジェクト (Every Life Counts)、学校教育プロジェクト (Shooting Souls)、HIVと共に生きる人々の健康教育プロジェクト (Project Safe House)。

プロジェクト名： 「#CultureFever (文化フィーバー)」

背景

- グローバル化の負の影響

目的

- 文化の理解促進
- もっと地域の製品を使うことを青年に促進
- グローバル化をうまく利用

対象： 大学生

活動内容

- ソーシャルネットワークでの写真チャレンジ「#CultureFever (文化フィーバー)」
- 文化フェア (地域製品のミニ展示)

タイムライン

- 2016年12月： 委員会発足、予算作成
- 2017年1月： スポンサー確保
- 2017年2月： 実施場所決定、ソーシャルメディアキャンペーン、広報
- 2017年3月： チケット、ロジスティクス
- 2017年4月： 「#CultureFever (文化フィーバー)」イベント開催

期待できる効果

- 青年がミャンマーの文化をより尊重し、地域の製品を使うようになる

K. フィリピン

「tHink posItiVe! Embrace and Erase (前向きに考えよう！受入れて偏見を消そう)」プロジェクトは、能力開発、ソーシャルマーケティング、国家青少年委員会 (NYC) 認定の青年組織へのHIV/AIDSに関する政策のロビー活動、ファシリテーターや地域自治体の人材確保を含むものである。フェーズ1はダバオ地方にて2017年1月から12月に実施する。

プロジェクト名： 「tHink posItiVe! Embrace and Erase (前向きに考えよう！受入れて偏見を消そう)」

プロジェクト種類： 能力開発とソーシャルマーケティング

プロジェクト提案者： フィリピンPYとパートナー

対象： 国家青少年委員会（NYC）の認定を受けている組織、12組織以上

場所： ダバオ地方

実施日

- フェーズ1： 2017年第二四半期（ミンダナオ、ダバオ地方）
- フェーズ2： （ビサヤ、イロイロ）
- フェーズ3： （ルソン、ビコール地方）

予算： フェーズ1： 1,000 米ドル

目的

- 包摂的で青年に優しく、利用しやすく持続的な青少年向けの性と生殖ヘルスサービスを作ること

活動内容

包摂的、参加型コミュニティ開発モデル

期待される効果

- ダバオ地方におけるHIV/AIDS活動に関わる有能な人材及び青年組織の増加
- ダバオ地方におけるHIV/AIDSに関する青年リソース人員の確保
- ダバオ地方におけるHIV/AIDSに関する政策、プログラム、プロジェクトや活動の増加

目的	方法	成功指標
青年組織委員会の認定する12組織の能力強化	パートナーシップと協働 能力開発セミナー 技術移転	最低25%の青年組織がHIV/AIDS啓発戦略を開発
ファシリテーターの育成	ファシリテーターのセミナーや研修の実施	最低限、一組織につき一人が技術移転
HIV/AIDS関連政策のロビー活	プロジェクト、プログラム、もしくは政策のレビュー 組織との対話	最低限、一つのプロジェクト、プログラム、活動の策定、もしくは一つの製作の草案完成